入試日程

2026年度 博士課程前期課程

		試験日	出願期間
一般社会人 スターリング大学 ダブルディグリーコース※ 英語教員対象 1年制修士学位コース	第1次	2025年9月13日(土)	2025年7月28日(月)～8月4日(月)
	第2次	2025年11月22日(土)	2025年10月22日(水)～10月29日(水)
	第3次	2026年2月21日(土)	2026年1月21日(水)～1月28日(水)

※スターリング大学ダブルディグリーコース第2次および第3次入試は、定員充足状況により実施しないことがあります。

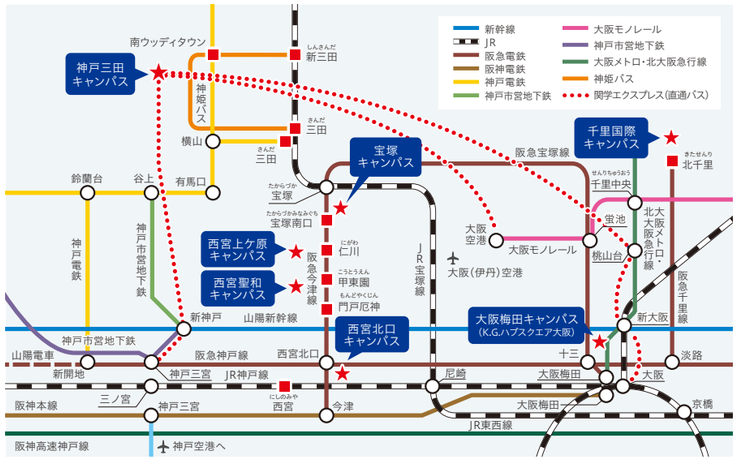
		試験日	出願期間
学内推薦	第1次	2025年9月13日(土)	2025年7月28日(月)～8月4日(月)
	第2次	2025年11月22日(土)	2025年10月22日(水)～10月29日(水)

2025年度・2026年度 博士課程後期課程

		試験日	出願期間
2025年度秋入学	秋学期入学	2025年7月5日(土)	2025年6月4日(水)～6月11日(水)

		試験日	出願期間
2026年度春入学	春学期入学	2026年2月20日(金)	2026年1月21日(水)～1月28日(水)

交通アクセス



西宮上ケ原キャンパス

〒662-8501　兵庫県西宮市上ケ原一番町1-155
阪急電車 今津線「甲東園」駅または「仁川」駅から西へ徒歩約12分
または「甲東園」駅から阪急バス約5分「関西学院前」下車

大阪梅田キャンパス

〒530-0013　大阪市北区茶屋町19-19
(アプローズタワー10、14階)
阪急電車「大阪梅田」駅から北へ徒歩約5分

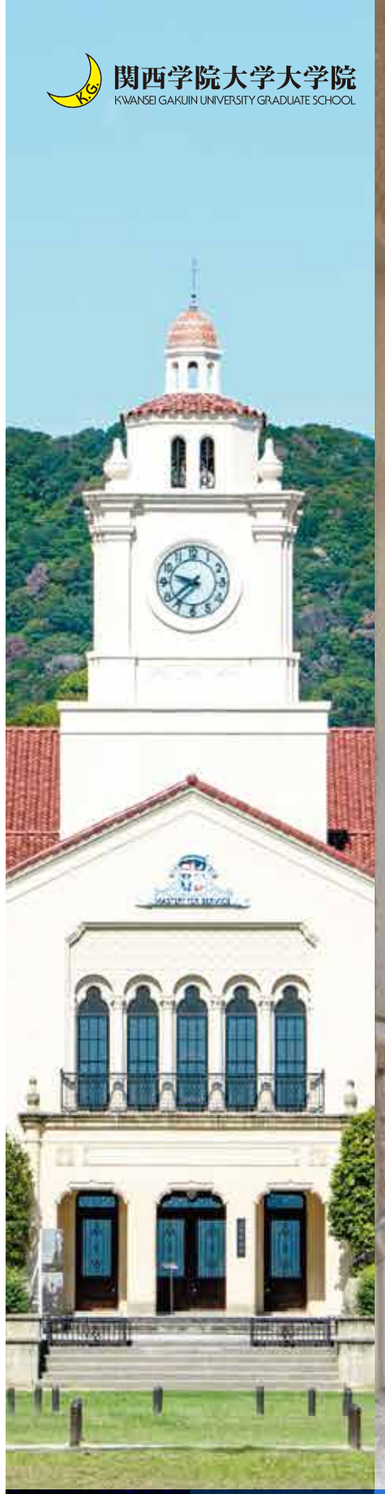
関西学院大学大学院　言語コミュニケーション文化研究科
〒662-8501 兵庫県西宮市上ケ原一番町1-155　Tel.0798-54-6180
https://www.kwansei.ac.jp/g_language/

研究科チャンネル

@genkomi2001

2025.6

関西学院大学大学院
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL



Graduate School of Language, Communication, and Culture

言語コミュニケーション文化研究科

言語科学領域 | 言語文化学領域 | 言語教育学領域 | 日本語教育学領域

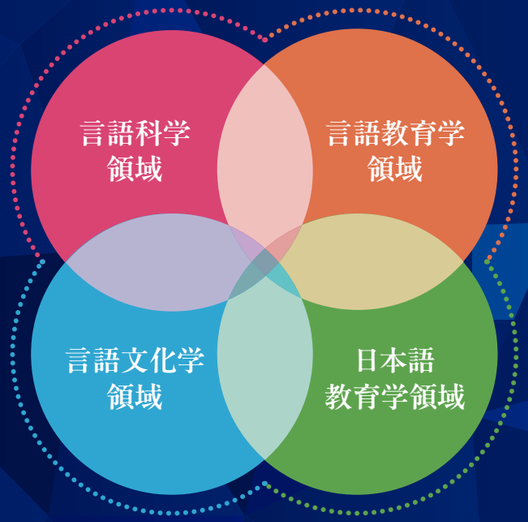
2026

Better Communication for a Better World

言語コミュニケーション文化研究科とは?

言語と文化の両面から人と社会にアプローチする新たな学問領域「言語コミュニケーション文化学」の構築を目指し、本研究科では、
言葉や文化の壁を越えて互いの力を分かち合い、高い志をもって未来を創造するグローバル化の時代の担い手となる人材を育成します。

4つの学問領域



前期課程

- 修士論文コース
- 課題研究コース
- スターリング大学ダブルディグリーコース
- 英語教員対象1年制修士学位コース

詳しくはP.3

後期課程

個別研究指導
＋
リサーチセミナー

詳しくはP.17

育てる人物像

言葉や文化の壁を越えて
互いの力を分かち合い、
高い志をもって
未来を創造する
グローバル化時代の担い手

研究科委員長メッセージ

好奇心を胸に、真摯な姿勢で

黒い顔、見開いた目、きらびやかな衣装。私が手にしている恐ろしげな顔の人形は、台湾の伝統劇・布袋戯（ポテヒ）に登場する、北宋時代に実在した名判事の包公（包拯）です。中国語圏の物語世界では、弱きを助け強きをくじく正義の人であるだけではなく、「昼はこの世を裁き夜はあの世を裁く」ほど超常的な力を備えたスーパーマンとして描かれます。

そんな包公が大切にするのは、事件に関わる人々と丁寧にコミュニケーションをとりながら調査を進めることです。街中を歩き回って証拠を探し、先入観にとらわれず色々な立場の人（時には証言を得るため「あの世」へ霊魂を訪ねて行きます）の言葉に耳を傾け、小さな気づきをきっかけに大きな事実を発見し、事件の真相へと迫っていくのです。

包公の態度は、大学院で研究する姿勢にも通じると思いませんか。当たり前のようで、こうした地道な作業を続けるのは意外に難しいものです。私たちはまずテーマを設定し、文献を調査したり人々にインタビューしたりするうちに、ある事実を見出し、説得力ある結論にたどり着きます。もちろん、その過程においては何度も試行錯誤を重ねることでしょう。そんなとき、包公は正義を貫きたいという情熱をモチベーションに行動しましたが、本研究科に集う皆さんには、代わりにマニアックなぐらいの好奇心を推進力として研究に携わって欲しいと思います。

言語科学、言語文化学、言語教育学、日本語教育学、どの領域を選んでも、強い好奇心を抱き、他者と深くコミュニケーションをとり、人や物事の多彩な背景を真摯に調べていけば、きっと皆さんの求める「真実」を獲得できることでしょう。

言語コミュニケーション文化研究科委員長
藤野 真子

※本冊子に掲載されている学生の学年表記、および卒業生の勤務先・所属先・企業名称は取材当時のものです。

前期課程

4つの領域と4つのコース、8つのプログラムを設置

前期課程では、4つの領域に分かれて学びますが、他の領域の科目も自由に履修できる柔軟なカリキュラムを設定しています。
また、指導教員やサブ・アドバイザーによるきめ細かな指導を徹底しており、確かな研究能力の養成に取り組んでいます。

	修士論文コース	課題研究コース	スターリング大学ダブルディグリーコース	英語教員対象1年制修士学位コース
言語科学領域	言語科学プログラム	言語科学プログラム	言語科学プログラム	
言語文化学領域	地域文化研究プログラム 多言語多文化学際プログラム 映像演劇文化プログラム			
言語教育学領域	言語教育学プログラム	言語教育学プログラム	言語教育学プログラム	言語教育学プログラム
日本語教育学領域	プロフェッショナルプログラム アカデミックプログラム 日本学ダブルディグリープログラム			

詳しくはP.15-16

前期課程(2年間)の流れ

	入学前（3月中旬）	第一学期（1年次春学期）	第二学期（1年次秋学期）	第三学期（2年次春学期）	第四学期（2年次秋学期）
修士論文コース	●指導教員 ●「研究演習」担当教員の決定	「研究演習Ⅰ」の履修 修士論文構想の検討		「研究演習Ⅱ」の履修 研究活動・論文作成準備	修士論文作成 修士論文提出 修士論文審査
教務上の指導					
課題研究コース	●指導教員（アドバイザー） ●「課題研究」担当教員の決定	課題研究活動 サブ・アドバイザーを決定しアドバイザリー・コミッティを構成 アドバイザリー・コミッティによる定期的な個別指導 課題研究計画書提出	アドバイザリー・コミッティによる定期的な個別指導 課題研究中間報告書提出	研究活動・論文作成準備 アドバイザリー・コミッティによる定期的な個別指導 「課題研究」の履修	課題研究論文作成 課題研究論文提出 アドバイザリー・コミッティによる定期的な個別指導 「課題研究」の履修 課題研究論文審査
研究雑誌に論文概要を発表					

「研究演習」を履修する
修士論文コース

出願時に提出した研究計画書に基づき、指導教員（研究演習担当教員）から「研究演習」を通じて研究指導を受けながら研究計画を立て、先行研究などの必須文献を通して知識を深めながら自律的に研究を進め、修士論文の作成に取り組みます。修士論文は学術的、理論的色彩の強い内容、もしくは調査分析をもとにした実証的な内容が求められます。

「課題研究」を履修する
課題研究コース

出願時に提出した研究計画書に基づき、入学後に指導教員、サブ・アドバイザーによるアドバイザリー・コミッティが結成されます。このアドバイザリー・コミッティとの年2回の相談会と個別相談により、各自が独自の課題について研究計画を立て、課題研究論文作成に取り組みます。課題研究論文はフィールド・ワークなど実践的、実学的な内容に加え、修士論文と同等レベルの内容が求められます。なお、課題研究コースは、言語科学、言語教育学に設置されています。授業は夜間に大阪梅田キャンパスを中心に履修して修了することができます。

両大学の修士号が取得できる
スターリング大学ダブルディグリーコース

出願時に提出した研究計画書に基づき、入学後に指導教員（研究演習担当教員）から「研究演習」を通じて研究指導を受けながら研究を進めていきます。1年次春学期に関学で「研究演習Ⅰ」を履修し、秋学期からはスターリング大学で「研究演習Ⅰ」、「研究演習Ⅱ」相当科目を履修し、修士論文の作成に取り組みます。修士論文は学術的、理論的色彩の強い内容や調査をもとにした実証的な内容が求められます。

英語教育の実務家としてスキルアップを図る
英語教員対象1年制修士学位コース

出願時に提出した研究計画に基づき、指導教員（研究演習担当教員）、サブ・アドバイザー2名によりアドバイザリー・コミッティを結成し、年2回の相談会と研究演習を通じて課題研究論文を作成します。課題研究論文を選択しない場合は、口頭による英語でのプレゼンテーションによって修士学位に相当する専門分野の知識や技能があるかを審査します。研究テーマについても実証的な内容に限らず、教育実践に焦点を当て、教材研究、授業研究など幅広く研究テーマを選択することができます。

アドバイザリー・コミッティ

課題研究コース、英語教員対象1年制修士学位コース生に対して、指導教員1名とサブ・アドバイザー2名の計3名でアドバイザリー・コミッティを構成し、学生の研究活動をサポートします。修了までの毎学期、アドバイザリー・コミッティ相談会が実施され、コミッティのメンバーと各自の研究計画や進捗状況について相談するほか、相談会以外でもe-mail等を活用した研究指導を受けることが可能です。

言語運用能力をブラッシュアップ

本研究科では言語運用能力をブラッシュアップするための授業を開講しています。国際的な学会でのプレゼンテーションやディベート、そして研究論文執筆に必要な「読む・書く・聴く・話す」能力を、「言語コミュニケーション能力養成科目」（英語・フランス語・ドイツ語・中国語）で養成します。

モデル・カリキュラム

● 修士論文コース ｜「言語科学」プログラムモデル

区分		言語コミュニケーション能力養成科目		領域研究科目				演習科目	履修科目
		基礎科目	運用能力養成科目	言語科学領域	言語文化学領域	言語教育学領域	日本語教育学領域		
1年次	春	異文化コミュニケーション論 2単位	英語オーラル・プレゼンテーション 2単位	言語意味論 2単位		言語教育研究法A 2単位		研究演習Ⅰ 2単位	春学期 10単位
	秋			心理言語学 2単位 対照言語学 2単位	言語文化学 2単位	言語学習心理学 2単位		研究演習Ⅰ 2単位	秋学期 10単位
2年次	春		英語エクスプレッシブ・ライティング 2単位				日本語文字・表記教育 2単位	研究演習Ⅱ 2単位	春学期 6単位
	秋		英語アカデミック・ライティングB 2単位					研究演習Ⅱ 2単位	秋学期 4単位
必要修得単位数		2単位	6単位	14単位				8単位	30単位

● 課題研究コース ｜「言語教育学」プログラムモデル

区分		言語コミュニケーション能力養成科目		領域研究科目				演習科目	履修科目
		基礎科目	運用能力養成科目	言語教育学領域	言語科学領域	言語文化学領域	日本語教育学領域		
1年次	春	言語コミュニケーション文化特論 2単位	英語オーラル・プレゼンテーション 2単位	言語教育研究法A 2単位 英語教育法 2単位	言語意味論 2単位	比較文化学 2単位			春学期 10単位
	秋		英語インテンシブ・リスニング 2単位	英語教育実践 2単位 言語教育研究法B 2単位					秋学期 8単位
2年次	春		英語エクスプレッシブ・ライティング 2単位	英語教育教材研究 2単位 小学校英語教育実践 2単位				課題研究 2単位	春学期 8単位
	秋		英語アカデミック・ライティングB 2単位					課題研究 2単位	秋学期 4単位
必要修得単位数		2単位	8単位	16単位				4単位	30単位

前期課程

UNIVERSITY of STIRLING ◆ スターリング大学ダブルディグリーコース

Double Degree Course

世界中の留学生が集う
英国スターリング大学で学び
両大学の修士号を取得

UNIVERSITY of STIRLING

最短2年間で、本研究科修士号（言語教育学または言語科学）および スターリング大学大学院MSc（TESOL）の2つの修士号を取得できます。

Message

University of Stirling
MSc in TESOL
Programmes Director
Adnan Yilmaz

As the Programme Director for the Double Degree between the universities of Kwansei Gakuin and Stirling, I am delighted to report that our first Double Degree student graduated in March 2018. After two years of study, this student graduated with two Master level degrees rather than one. I strongly believe that our partnership will prosper further with our current and future double degree students.

In an increasingly interconnected world, partnerships through Double Degrees offer strong prestige and therefore stand as a sign of the future. In the fields of education in general and TESOL in particular, the enhanced exposure to and awareness of different learning and teaching styles via such partnerships can enrich and develop our knowledge and understanding of the field, which, in turn, informs our own practice. By providing the opportunity to study in Japan and Scotland, our Double Degree provides this particular opportunity precisely.

Other benefits of the Double Degree programme include: providing an excellent balance between theory and practice, increasing (inter)cultural awareness through collaboration with students from different parts of the world, and most importantly, increasing future employability and promotion prospects. Graduates of our Double Degree are truly global citizens.

2つの修士号を取得できるダブルディグリーコースです。

関西学院大学大学院からスターリング大学大学院に2セメスター留学し、所定の単位を修得して双方の修士論文審査に合格することによって、両大学の修士号を取得できる制度です。

TESOLを専攻し英語教育を学ぶことができます。

世界各国の留学生と机を並べながら、最新の研究動向に精通したアカデミックスタッフのもと、英語教育の実践的テクニックと、その裏付けとなる理論を学ぶことができます。

TESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages）
英語の非母語話者への英語教授法。スターリング大学では、モジュール（科目）選択の組み合わせによって、TESOL、TESOL and Applied Linguistics、TESOL and Computer-assisted Language Learningの3つから、取得する修士号（MSc）を選ぶことができます。

スターリング大学

創　　立　1967年
学校種別　国立
所 在 地　英国スコットランド

世界の大学ランキングにおいて総合五つ星を獲得する英国スコットランドの総合大学。湖や18世紀の古城を取り囲む330エーカーの広大なキャンパスに、講義棟、図書館、学生寮、スポーツ施設、アート・センター、カフェ、レストランが建ち並び、11,000人以上の学生が学ぶ。115ヶ国からの留学生が全体の30%を占め、学習・生活の両面におけるサポートも充実している。
＊QS World University Rankings 2024/2025

修了生からのメッセージ

受験時点では、コロナ禍で渡英できるか確約がありませんでしたが、なんとか落ち着き念願のダブルディグリー留学が叶いました。世界各国から教員経験のある学生とない学生が集まるので、教育現場の現実や苦労と教育への理想がぶつかり合い、授業では活発な議論がなされ多角的な視点を身につけることができます。英語教育は国によって異なるので、クラスメイトの話を聞くのは楽しい時間です。新学期が始まるや否や課題に追われる日々ですが、授業のあとに友人と一緒にランチを食べながら、課題のつらさを分かち合い、励まし合い、助け合うという関係が自然と生まれます。未知の国出身のクラスメイトとの出会いや、多文化に触れる機会は、今後の英語指導に生かせる貴重な経験となります。スターリング大学で得た知識やメソッドがこれからの英語教育への向き合い方を高め、そして何よりも友人たちが苦難を共にした同志として日本帰国後も共にいてくれます。ちょっとした休暇があれば、友達と少し遠くに足を伸ばしたり、旅行したりしました。せっかく英国まで行くのですから、勉強以外にもいろいろ体験してください。笑ったり泣いたりの1年間は本当にあっという間です！一日一日を思いっきり楽しみ、課題に奮闘し、充実した時間を過ごしてください。

池名 友 2024年3月前期課程修了

2年間の基本的な流れ

1年次		2年次	
セメスター1　4月～7月	セメスター2　9月～12月	セメスター3　1月～8月	セメスター4　9月～3月
関西学院大学 言語コミュニケーション能力 養成科目を中心に履修	スターリング大学 **TESOLコースで 専門科目履修**	スターリング大学 **TESOLコースで 専門科目履修／学位論文提出**	関西学院大学 専門科目、演習科目の履修 学位論文提出

学費・奨学金　※2025年度実績

学費				奨学金
1年春学期	1年秋学期	2年春学期	2年秋学期	
約35万円 （+入学金20万円）	関西学院大学：5万円（通常：約70万円） スターリング大学：£9,937（通常：£20,600）		約35万円	月額7万円支給 （留学期間中）

主な受験資格

希望者は「スターリング大学ダブルディグリーコース入試」を受験します。

主な受験資格
- IELTS（Academic Module）: 6.0以上（Speaking & Listening 5.5, Reading & Writing 6.0）
- TOEFL IBT: 69点以上（Speaking 17, Listening 11, Writing 23, Reading 18）
- Pearson Test of English（Academic）: 54点以上（Speaking 51, Listening 56, Reading & Writing 60）
- Cambridge Certificate of Proficiency in English（CPE）: Grade C
- Cambridge Certificate of Advanced English（CAE）: Grade C

入学試験形態
口述試験

前期課程

言語科学領域

人が言語を駆使する仕組みを多角的に追究

ことばを科学的視点から分析し、言語の実態を明らかにする

言語構造、言語コミュニケーションを有効に成り立たせる条件、人間が言語をどのように駆使するかなどを科学的に解明します。研究分野としては、音声学、音韻論、統語論、意味論といった言語科学の基礎を成す分野や、文と文脈との関連性を考える語用論、生得的な言語獲得能力と外国語習得との関わりを研究する言語習得論、言語と社会との関わりを研究する社会言語学、言語と心理との関係を研究する心理言語学、言語使用の実態研究を行うコーパス言語学、言語表現論など、言語コミュニケーション能力の解明に関する分野があります。後者は言語教育や文化に関する研究とも関係しています。基礎分野を概観する講義で言語を科学的な分析の対象にすることの意味を学び、さらに各論の講義において、その分野での研究方法を身につけることができるようになっています。

CLOSE UP 講義

音声科学

言語の音声面における規則や現象に焦点を当てます。講座の後半では音韻論（音体系中の規則を明らかにする分野）も扱います。研究対象言語は主に日本語と英語ですが、音声学の範囲は大変広いので、外国語教育に役立つ調音音声学を主に取り扱います。

心理言語学

認知心理学や生理心理学で使われている実験方法から得られるデータに基づいて、言語の理解や発話生産の過程及び言語の獲得・喪失のしくみを明らかにする学問分野です。母語話者だけではなく、第二言語の学習者についての研究も扱っています。

対照言語学

まったく系統の異なる日本語と英語について、言語そのものはもちろん、文化や発想などにも踏み込んで、両言語の体系を対比します。生成文法、機能文法、言語類型論などの観点からの研究成果を参照しつつ、片方の言語を分析するだけでは分からない両言語の特徴を明らかにします。

コーパス言語学

コーパス言語学とは何か、そして、英語のコーパスを使った実際的な研究方法について学びます。コーパスの基礎的理論を理解したうえで、コーパスをどのように言語研究や辞書編纂に活かしていくことができるか検討していきます。

修士論文・課題研究論文テーマ（抜粋）

- On the Licensing of Negative Polarity Items in the Complement of Inherently Negative Verbs
- 日本語かき混ぜ文におけるフィラーギャップ依存関係の処理過程 ―事象関連電位を指標として―
- 聾学校におけるろう児と教師の関係性についての社会言語学的研究
- Adjectival Comparison with Less: A Corpus-Based Semantic Approach
- Revival and Revitalization of Minority Language: The Case of Chamorro in Guam
- Aspect Markers in Kochi Japanese in Comparison with Tokyo Japanese and English: Their Syntax and Semantics

Message from Students

英語という言語を深く知るための2年間 新たな視点を得た学びの道のり

学部時代に理論言語学という分野に出会い、英語の現象に潜むルールに魅了されました。当時は、母語話者や言語学者の提唱する「理論」や「ルール」が正しく、それを知ることが「英語を知ること」だと考えていました。しかし、指導教員の住吉先生から、「英語の特性は誰かの理論や直感ではなく、自ら実例を見てコツコツ明かすもの。だからこそ、毎日少しでも英語に触れ続けることが大切」という教えを受け、英語への向き合い方が根本から変わりました。修士論文では多くの実例を1つ1つ分析し、これまでに気づかれていない英語構文の性質を実証的に明かすことができました。また、この研究に取り組むことで、英語の現象は理論や直感だけで簡単に説明できるものではないと学びました。今後は高校や大学で英語を指導し、ここで得た新たな視点を大切に、英語という言語をもっと知りたいと考えています。

在学生

舘 洋祐
前期課程 修士論文コース2年

言語態度の形成プロセスを解明し 豊かな言語観を育む教育を目指して

多言語化が進む現在、幼い頃から多様な言語に心を開き、親しむことができる教育を実現するため、子どもの言語意識や言語態度をより深く探究したいと考え、本研究科に進学しました。前期課程では、就学前幼児の異言語に対する態度を明らかにすることを試みました。この研究を基盤に、後期課程では、幼児期における言語態度形成のプロセスとその背景を多角的に解明し、柔軟な言語観を養う教育への示唆を提供することを目指しています。

このような研究を進める中で、「社会言語学」の授業は私に多くの気づきを与えてくれました。社会言語学は、身の回りの言語現象をあらゆる視点から記述・分析し、ことばの多様性に気づかせてくれる学問です。特に、一人ひとりの「話者」に目を向け、ステレオタイプを超えてことばを捉える視点は、私の研究にとって欠かせない支えとなっています。

修了生

岡本 舞夏
前期課程 修士論文コース 2024年3月修了
後期課程1年

前期課程

言語文化学領域

英語圏、フランス語圏、
ドイツ語圏、中国語圏など
さまざまな言語と文化を研究

境界線を超える～多言語・多文化社会への学際的アプローチ～

多言語・多文化社会を積極的に理解し、異文化理解の視点からグローバルに行動できる人材を養成します。「比較文化学」「異文化理解」などの科目は言語や文化の境界線を超えようとする科学です。各プログラムの特徴ですが、まず「地域文化研究プログラム」はヨーロッパ、北米、日本を含む東アジア地域の言語や文化にかかわる基礎研究を踏まえて、言語と文化の問題をさまざまな角度から扱います。「多言語多文化学際プログラム」は境界線を超えた言語・文化事象に関わる多彩な問題を扱います。また「映像演劇文化プログラム」は、映画・演劇という文字テクストの枠を超えた表象文化に関わる問題群を扱います。

CLOSE UP 講義

日本文化

近年、「日本的なもの」を他国の文化から差別化し、再評価する動きが日本国内にあります。和食、富士山、桜など。この講義では「日本的なもの」という表象の起源をさぐると共に、それを徹底して「外から」相対化することを目指します。

多言語主義・多文化共生

人の移動が激しくなり、社会は多文化・多言語化しています。その現象を、シティズンシップ教育、海外と国内の日本語教育、ヨーロッパの言語政策、ヘイトスピーチ、猪飼野の民族関係、日本の多言語化などを題材にして質的に考察します。

言語文化学

4人の教員によるオムニバス形式の授業。英米文化・文学におけるモダニズムおよびポスト・モダニズム期に焦点をあて言語文化の多様性と歴史を学ぶと同時に、人文科学研究の在り方そのものも批判的に考えます。「言語文化」を研究するとは？ ぜひ一緒に考えましょう。

映画学

映画学Aではアメリカ、映画学Bではアジアを軸に、映画／映像の分析を通じて、文化を多面的に理解することを目指します。テクストとコンテクスト（文化的・社会的・歴史的文脈）を意識し、クロスメディア研究から見えてくる複雑な文化体系を学問しましょう。

修士論文・課題研究論文テーマ（抜粋）

- 日本の安楽死議論における「家族」が果たす役割
  ―日本思想と西欧思想の比較検討を中心に―
- ウィメン・オン・ザ・ロード
  ―『テルマ＆ルイーズ』におけるジェンダーとジャンル―
- 清末民初の劇場の変遷と上海社会 ―「上海戯園変遷志」を中心に―
- ベトナム戦争映画のモチーフと二重化
  ―『地獄の黙示録』におけるウィラードの揺らぎについて―
- 英語教科書における異文化理解題材の分析
- カナダ在住国際結婚の日本人女性達のライフストーリー

Message from Students

あらためて学び続けることの大切さを実感しました

社会人として仕事をする中で、より深い知識を身につける必要性を感じ入学を決意しました。目標はフランス語で論文を書くこと、研究テーマは「フランス料理の名称の変遷」で、上田和彦先生にご指導いただきました。入学して良かったことは、ゼミや授業を通し、知識だけに偏らず、視点を変えて考えるスキルを養えたことです。また、先生の助言もあり、他研究科履修制度を利用し、学内の他研究科の授業を併せて履修できたことも大きなメリットでした。これにより、自分自身の研究テーマに関するさらに幅広い視点を得ることができたと思います。仕事との両立は簡単ではありませんでしたが、優先順位をつけることで「大変さ」を「充実」に変えることができたと実感しています。前期課程は、硬くなりかけた頭に刺激を与え、学び直すことの大切さに気づかせてくれた貴重な2年間でした。

在学生

川﨑 清美
前期課程 修士論文コース2年

異文化理解の基礎であるコミュニケーション研究を、ホスピタリティ業の実務に生かしています

世界の多様な文化について、言語研究という観点で理解を深めたく、入学しました。本研究科は留学生が多いので、普段何気なく使っている日本語を、比較文化論という新鮮な角度から考え直し、学び直す良い機会を持てました。また、学生間の連帯感が強く、各自の研究を助け合ったり、時事問題や身近な話題を気軽に話しながら信頼関係を築くことができました。私の指導教員はドイツ人の先生だったので、日本と西洋での言語に対する姿勢や考え方の相違を直に体験できました。毎回のゼミでは、言語ゲームという西洋哲学の実践をしているようなわくわく感があり、知的刺激に満ちていました。現在はホスピタリティの職務に就いているため、本研究科で学んだ言語によるコミュニケーション、さらには言葉を超えた「心づかい」による意思疎通などを、実務の上で存分に生かすことができています。

修了生

上田 茉弥
前期課程 修士論文コース 2023年3月修了
客室乗務員

前期課程

言語教育学領域

学際的、実証的に
言語教育を探究

言語教育の変容に柔軟に対応できる確かな教育力を養成

今、外国語の学習・習得研究が脚光を浴びています。なぜでしょうか。これまで言語教育学の主な目的は、その研究成果を教室での教授法に応用することでした。しかしそれだけでなく、外国語の習得（acquisition）という「窓」から、言語習得という「知的いとなみ」、さらには人の「こころの仕組み」を調べる…そんな領域へと変貌したからです。言語の習得や教育の基本を扱う言語教育学、第二言語習得、早期英語教育理論などから、中高生に英語を教える実践を学ぶ英語教育実践、教育評価や、小学校での外国語活動のための小学校英語教育実践まで、言語教育学の全領域をサポートします。現代の言語教育学の潮流へと、しっかりとしたチャート（海図）をもって、皆さんをご案内します。

CLOSE UP 講義

第二言語習得

外国語の学習・教育実践に応用できる言語学習理論について深く学べる科目です。心理言語学、応用言語学、神経科学などの知見に基づき第二言語習得を可能にしている「こころの仕組み」について探究します。

言語教育政策

言語政策を教育の視点からマクロに議論します。文部科学省、教育委員会、学校は公的な制度です。教科書検定、常用漢字、ヨーロッパ言語共通参照枠、識字教育、日本語教育推進法なども言語教育政策の話題です。

小学校英語教育実践

2020年度から「外国語活動」の開始が小学校中学年に引き下げられ、高学年には教科としての「外国語」が導入されました。「聞くこと」「話すこと」を中心に外国語に慣れ親しむ「外国語活動」、「読むこと」「書くこと」も含め総合的に学ぶ「外国語」、それぞれの指導計画、教材研究、評価の在り方などについて学びます。

教育評価

授業ではいろいろなテストが実施されます。しかし、それらのテストは生徒の外国語能力や授業で教えたことを適切に測れているのでしょうか。この科目では、「測ること」の基礎と、評価への応用の方法について学びます。

修士論文・課題研究論文テーマ（抜粋）

- Effective Vocabulary Learning for Japanese High School EFL Learners: Prefix Mnemonics
- Intergenerational Transitions of English Education: Toward the Acquisition of Linguistic Capital
- Japanese Students' Communication Strategies During Their ELF Experiences in the U.K.
- 生徒の自主的発話が促されるとき―集中の持続が難しい生徒のインタラクションから―
- Applying the Keyword Method to Learning English Idioms: Considerations for Native Japanese Speakers
- Differences in the Degree of Gender Stereotypical Beliefs and Motivation towards EFL Learning among Male and Female Students in the Japanese Context

Message from Students

手に取った本の著者である先生の下で、教育政策について深く学びたいと考えました

卒業論文の執筆を通して研究活動に興味を持ち、大学院進学を決意しました。大学時代に所属していたゼミの先生が社会学専攻であったこと、そして私自身英語の学習が好きだったことから、研究テーマを「英語教育」×「社会学」に絞り、書籍や先行研究を読み進めていきました。そんな中で指導教員の寺沢先生の書籍に巡り合ったことをきっかけに、本研究科への進学を決めました。現在は外国語教育政策を対象に、その形成過程や政策評価に関する研究を進めています。本研究科には、大学卒業後そのまま進学された方はもちろん、一度社会に出た後に入学された方、そして留学生の方々も多く所属しています。異なる背景を持つ学生同士で交流できることが、本研究科の大きな魅力であると考えます。そして、憧れの先生の指導の下で研究活動が出来ることは、自分にとって大きな財産となっています。

在学生

深水 千紘
前期課程 修士論文コース1年

魅力的な英語の授業を目指して、これからも学び続けていきたい

私は大学時代に教育実習に参加し、英語教員としての知識と技量の不足を痛感しました。自分の英語力を向上させ、英語教育の専門性を高めるために、本研究科に進学しました。修士論文では、自分が英語で書いた文章について他の生徒からフィードバックを受ける「ピア・フィードバック」と、自分自身で見直す「セルフ・エディティング」の効果を比較しました。近年注目されている協働的な学びをどのように実践できるかを研究しました。

本研究科の魅力は、少人数制で先生方が寄り添った指導をしてくださる点です。ゼミや授業はとてもアットホームな雰囲気で、活発なディスカッションを行うことができます。本研究科で学んだことが、教員として働いている今の自信やモチベーションにもつながっています。生徒に魅力的だと思ってもらえるような授業を目指して、これからも学び続けていきたいです。

修了生

櫻井 稚子
前期課程 2024年3月修了
神戸市立中学校 教諭

前期課程

日本語教育学領域

外国語・第二言語としての日本語教育の実践者を育成

多くの修了生が日本語教育の専門知識を活かして国内・海外で活躍

日本語教育を通じて地域社会・国際社会へ貢献できる人材輩出を目指します。それに関わる言語・文化・教育学の内容であればいずれもここで研究することができます。たとえば、音声学や語彙・文法の研究、日本語と他言語の対照、言語習得論、教授法と教材開発、コミュニケーション論、談話分析、社会言語学、心理言語学、言語教育政策、日本文学・文化論、メディアとカルチャーなどが挙げられます。また、多様化する日本語教育のニーズに合わせた実践授業に加え、現職日本語教師のリカレント教育も行います。各分野の専門家である指導教員が温かく指導に当たっており、満足のいく研究ができます。修了生は、国内外の大学教員、日本語学校や中高の教員、会社員などとして幅広く活躍しています。

CLOSE UP 講義

日本語教育実践

日本語学習者向け教材の分析、教案作成、模擬授業などを行いながら、日本語を教えるために必要な知識やスキルを身につけるための科目です。授業活動を通じて、問題解決の方法や効果的な指導法などを各自の実践をもとに考えます。

日本語語彙・文法教育

日本語非母語話者を対象とする日本語教育を円滑に行うためには、日本語の語彙や文法の知識が必要です。この授業は、日本語非母語話者への日本語教育に必要な語彙や文法の基礎知識を学ぶことを目的としています。

日本語会話分析法

対人コミュニケーションのプロセスを分析するためのツールとして社会学の分野で確立された「会話分析」(Conversation Analysis)の方法論について学びます。会話分析の理論的背景や基本的な考え方を押さえたあと、日常会話の構造を分析するためのさまざまな切り口を紹介し、各自が収集した具体的な会話データを分析できる素地を養成します。

日本語フィールド調査法

この授業では、多文化間コミュニケーションにおける「共通語としての日本語」をテーマとしたフィールド・ワーク調査を実施します。調査の全ての段階(企画・実施・データ分析)を共同で行い、社会言語学的観点からの言語/コミュニケーション研究のさまざまな調査/分析方法を紹介、検討、そして応用することが主な目的です。

修士論文・課題研究論文テーマ(抜粋)

- 日本語教育における文学教材の可能性
- 相互文化理解を目指した授業づくりに関する一考察
  ―自他表象のディスコースに注目して―
- 初対面における日韓ほめについての対照研究―会話分析によるアプローチー
- 言語間音韻類似性の単語認知に与える影響
  ―中国語を母語とする上級日本語学習者の単漢字語に対する語彙性判断時間を指標として―
- 日本語目的語残存受身文における目的語の機能について
  ―中国語の"保留宾语被动句"との対照の視点から―
- 2010年以降の中国における日本映画の受容

Message from Students

日々の教育活動だけでなく日本語教育に何かを還元できる教員になりたい

2015年から日本語教師として日本語学校で指導してきました。日ごろの教育活動の中で、教材間における文法等の説明の違いに疑問を持っていました。なぜ同じ文法なのに、教材によっては説明に違いがあるのか、どれが正しいのか、自らその答える見つけるために、本研究科に入学しました。現在は先行研究と大規模コーパスにおける使用実態と学習者の誤用の分析を行っているところです。修了後はまた日本語学校の現場に戻り、日本語を指導したいと考えています。日本語教育は変革期にあり、日本語教師にはさらなる専門性が求められています。今までは経験や勘に頼って授業をしていましたが、今後は自分の授業でのすべての行いに根拠を与え、ただ授業をやりっぱなしにするのではなく、しっかりと自分の教育活動を振り返り、改善し、教員として成長していけるように頑張っていきたいです。

在学生

閆 守乾
前期課程 修士論文コース1年

言コミで多様な仲間と出会い成長することができました

私にとって、本研究科は、学問を追究するための基本的な姿勢を学ぶだけでなく、人として成長するうえでも、欠かせない場所だったと感じます。なかでも、本研究科の「良さ」は「多様性」にあると考えています。授業や研究活動を通してだけでなく、さまざまな背景をもつ院生間で、「なぜ本研究科に来たのか」について話すだけでも、多くの生き方や考え方を教わることができました。また、研究分野の違いも相まって、お互いの研究内容を共有するだけでも新しい知見が得られ、楽しかったことを覚えています。そして何より院生生活を通じて大切な仲間ができたことは、今でも私の支えになっています。本研究科での数々の思い出と、大学院生活で学んだ多角的な視野で物事を捉える姿勢を糧に、さまざまな人との関わりを大切にしていきたいと思います。

修了生

肥田 栞奈
前期課程 修士論文コース 2019年3月修了
後期課程 2023年3月修了
関西学院大学教務機構ライティングセンター 助教

カリキュラムと修了要件（前期課程）

科目区分			言語コミュニケーション能力養成科目		領域研究科目【注1】				実習科目	演習科目			修了必要単位数
授業科目の名称（単位数）			〈基礎科目〉 言語コミュニケーション文化特論(2) 異文化コミュニケーション論(2) スピーチ・コミュニケーション論(2) ことばと文化(2) 英語と文化(2)	〈運用能力養成科目〉 [英語科目] 英語インテンシブ・リスニング(2) 英語オーラル・プレゼンテーション(2) 英語ディベート(2) 英語エクスプレッシブ・ライティング(2) 英語アカデミック・ライティングA(2) 英語アカデミック・ライティングB(2) [フランス語科目] フランス語論文作成(2) フランス語読解(2) フランス語コミュニケーション(2) [ドイツ語科目] ドイツ語論文作成(2) ドイツ語読解(2) ドイツ語コミュニケーション(2) [中国語科目] 中国語論文作成(2) 中国語読解(2) 中国語コミュニケーション(2)	〈言語科学領域〉 言語科学(2) 言語意味論(2) 言語語用論(2) 社会言語学(2) バイリンガリズム(2) 音声科学(2) 言語表現論(2) 辞書学(2) 心理言語学(2) 言語習得論(2) 言語構造論(2) 対照言語学(2) コーパス言語学(2) 言語障害学(2) 言語変異・変化論(2)	〈言語文化学領域〉【注2】 言語文化学(2) 比較文化学(2) 異文化理解(2) 思想と文化(2) 批評と文化(2) 演劇学A(2)* 演劇学B(2)* 映画学A(2)* 映画学B(2)* 多言語主義・多文化共生(2) 日本文化A(2)* 日本文化B(2)* 英語圏文化(アメリカ)A(2)* 英語圏文化(アメリカ)B(2)* 英語圏文化(イギリス)A(2)* 英語圏文化(イギリス)B(2)* フランス語圏文化A(2)* フランス語圏文化B(2)* ドイツ語圏文化A(2)* ドイツ語圏文化B(2)* 中国語圏文化A(2)* 中国語圏文化B(2)*	〈言語教育学領域〉 言語教育学(2) カリキュラムデザイン(2) 教育評価(2) 英語教育教材研究(2) 英語教育実践(2) 言語教育政策(2) 第二言語習得(2) 授業分析(2) 小学校英語教育実践(2) 英語教授法実践(2)【注3】 言語学習心理学(2) 英語教育法(2) 早期英語教育理論(2) 言語教育と社会(2) 言語教育研究法A(2) 言語教育研究法B(2)	〈日本語教育学領域〉 日本語教育学概論(2) 日本語語彙・文法教育(2) 日本語会話分析法(2) 日本語と中国語の翻訳研究(2) 日本語音声教育(2) 言語習得と日本語教育(2) 日本語フィールド調査法(2) 日本語と英語の翻訳研究(2) 日本語文字・表記教育(2) 言語社会と日本語教育(2) 日本語教育トピックス(2)	日本語教育実践Ⅰ(3)【注4】 日本語教育実践Ⅱ(3)【注4】	研究演習Ⅰ(2)	研究演習Ⅱ(2)	課題研究(2)	30単位
修士論文コース	言語科学領域	言語科学プログラム	2単位	・英語科目 ・ドイツ語科目 ・フランス語科目 ・中国語科目 } の中から6単位	14単位	（選択したプログラムの領域研究科目４単位を含む）			—	4単位	4単位	—	30単位
	言語教育学領域	言語教育学プログラム		・英語科目 ・ドイツ語科目 ・フランス語科目 ・中国語科目 } の中から6単位	14単位	（各語圏文化の２単位とそれ以外の言語文化学の領域研究科目２単位を含む）			—	4単位	4単位	—	
	言語文化学領域	地域文化研究プログラム		・英語科目 ・ドイツ語科目 ・フランス語科目 ・中国語科目 } の中から2単位	18単位	（多言語主義・多文化共生の2単位とそれ以外の言語文化学の領域研究科目２単位を含む）			—	4単位	4単位	—	
		多言語多文化学際プログラム											
		映像演劇文化プログラム			18単位	（演劇学A・B、映画学A・Bの中からの2単位とそれ以外の言語文化学の領域研究科目２単位を含む）				4単位	4単位	—	
	日本語教育学領域	プロフェッショナルプログラム	— （履修は可）		16単位	（日本語教育学の領域研究科目１０単位を含む）			6単位	4単位	4単位	—	
		アカデミックプログラム			22単位	（日本語教育学の領域研究科目８単位を含む）			—				
		日本学ダブルディグリープログラム			22単位	（日本語教育学の領域研究科目８単位を含む）			—				
課題研究コース	言語科学領域	言語科学プログラム	2単位	・英語科目 ・ドイツ語科目 ・フランス語科目 ・中国語科目 } の中から8単位	16単位	（選択したプログラムの領域研究科目４単位を含む）			—	—	—	4単位	30単位
	言語教育学領域	言語教育学プログラム											
スクーリング大学ダブルディグリーコース	言語科学領域	言語科学プログラム IELTS6.5以上に相当する者	2単位	英語科目の中から4単位（1年春学期に履修）	16単位	（選択したプログラムの領域研究科目４単位を含む）			—	4単位	4単位	—	30単位
		言語科学プログラム IELTS6.5未満に相当する者		英語インテンシブ・リスニング 英語オーラル・プレゼンテーション 英語アカデミック・ライティング　6単位必修（1年春学期に履修）	14単位	（選択したプログラムの領域研究科目４単位を含む）			—	4単位	4単位	—	
	言語教育学領域	言語教育学プログラム IELTS6.5以上に相当する者	2単位	英語科目の中から4単位（1年春学期に履修）	16単位	（選択したプログラムの領域研究科目４単位を含む）			—	4単位	4単位	—	
		言語教育学プログラム IELTS6.5未満に相当する者		英語インテンシブ・リスニング 英語オーラル・プレゼンテーション 英語アカデミック・ライティング　6単位必修（1年春学期に履修）	14単位	（選択したプログラムの領域研究科目４単位を含む）			—	4単位	4単位	—	
英語教員対象一年制修士学位コース	言語教育学領域	言語教育学プログラム	2単位	—	24単位	（英語教授法実践２単位とそれ以外の言語教育学プログラムの領域研究科目18単位を含む）			—	4単位	—	—	30単位

※ 修了要件の一つ（専門外国語学力の認定）として「運用能力養成科目」２科目の履修あるいは、研究科が定める外部試験において一定以上のスコアが必要である。
（外国人留学生の専門外国語学力認定については別途定める）

【注1】領域研究科目の開講原則:4学期間に昼2回（言語科学と言語教育学は昼と夜を各1回）開講する。

【注2】*「演劇学」、「映画学」、「日本文化」、「英語圏文化（アメリカ）」、「英語圏文化（イギリス）」、「フランス語圏文化」、「ドイツ語圏文化」、「中国語圏文化」、それぞれA・Bともに隔年開講する。（A・Bあわせて、4学期間に2回開講する。）

【注3】英語教授法実践は、英語教員対象1年制修士学位コース学生以外は履修不可。

【注4】日本語教育実践Ⅰ・Ⅱは日本語教育学（プロフェッショナル）プログラムの学生以外は履修不可。

後期課程

個人指導、集団指導で手厚くサポート

本研究科は、言語教育、異文化理解、第二言語習得、心理言語学、対照言語学、社会言語学、会話分析など、言語と文化が深く関わりあう領域を専門とする研究者を輩出しています。後期課程では、指導教員が実施する個人指導の「個別研究指導」と、指導教員を含む３名の教員によって構成されるアドバイザリー・コミッティが実施する集団指導の「リサーチセミナー」の２つによる研究指導が行われます。

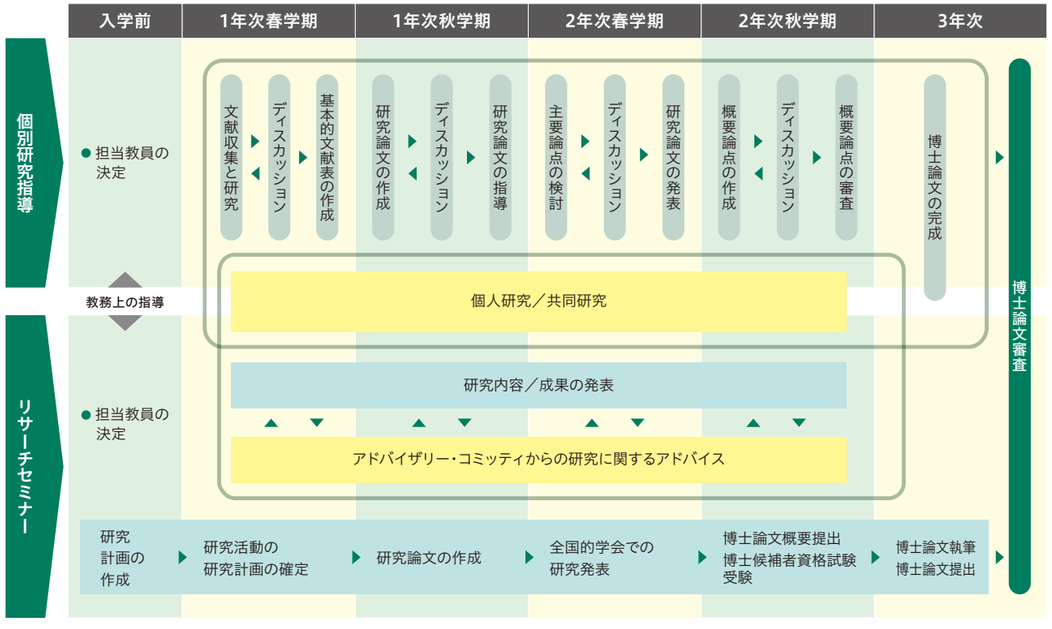
個別研究指導

指導教員による研究演習です。学生による研究の経過報告と指導教員によるコメントや助言を中心に、週に１回、３年間にわたって指導し、博士論文の作成を進めます。専門的な研究指導を行うとともに、課程修了後、言語コミュニケーション文化の専門研究者として独り立ちするために、文献・資料の収集方法、論文作成方法などの技術的側面の指導から研究に対する姿勢まで全般にわたって指導します。

リサーチセミナー

集団指導体制によって実施されるセミナーです。言語科学、言語文化学、言語教育学、日本語教育学の４領域を統合した言語コミュニケーション文化の観点から横断的、総合的に各自の研究を推進し、課程修了後、研究者として自立して研究を遂行していく能力を身につけることを目標とします。セミナーは、指導教員を含む３名の教員からなるアドバイザリー・コミッティが担当し、毎月１回、学生による研究内容の報告を中心に行われます。なお、本セミナーは研究科内で原則として公開とし、アドバイザリー・コミッティ以外の他の研究科教員及び院生にも開かれています。

後期課程(3年間)の流れ



※博士課程後期課程の必要修得単位数は12単位とし、個別研究指導12単位およびリサーチセミナー6セメスター分の履修を必修とする。

授業・研究に対する充実したサポート体制

01. 言語コミュニケーション・フォーラム

各学生が研究成果を発表し、各方面の研究者（学会構成員である教員や院生）からコメントや助言を受けることができる場として、毎学期（年2回）開催されます。フォーラムでの発表は、論文や研究成果の方向性を段階的に確認し、他者の視点を加えて論文の質を高めることを目的としています。また、各分野の著名人、専門家の講演等も随時開催され、最新の研究についての情報を吸収することもできます。

02. セメスター制と授業開講時間帯

原則として半年開講のセメスター制を採用し、昼夜開講のカリキュラムを編成しています。また一般学生、社会人学生の区別なく授業を開講し、課題研究コースでは夜間授業のみの履修でも修了に必要な単位を修得することができます。

03. 大学図書館〈西宮上ケ原キャンパス〉

蔵書数約150万冊で、西日本有数の規模を誇り、国内外のあらゆるデータベースが活用できます。また、申込制による研究個室も利用できます。

04. 学生共同研究室〈西宮上ケ原キャンパス〉

大学院棟（１号館）内に、院生専用スペース（延べ86席、パソコン45台設置）があり、夏季および冬季休暇期間以外は23:00まで利用可能です。また、G号館1階に、本研究科院生専用の共同研究室があり、自習や院生の情報交換の場として活用されています。

05. 大阪梅田キャンパス（K.G.ハブスクエア大阪）

夜間授業（Ⅵ時限・Ⅶ時限）は原則として大阪梅田キャンパスで実施します。梅田キャンパスでは、専門職大学院経営戦略研究科の授業を実施している他、学部学生の就職支援活動、各種セミナー、産学連携、研究会活動、同窓会などの活動が行われています。

06. 交換留学

交換留学は、本学に在籍しながら、協定大学へ1学期間または2学期間（1年）留学できる制度です。本研究科協定先のサンフランシスコ州立大学をはじめ、関西学院大学の協定校への留学が可能です。

07. 教職課程(専修免許)の設置

前期課程では、専修免許（中学英語、高校英語）を取得することができる教職課程を設置しています。言語科学・言語教育学プログラムでは、一種免許（中学英語、高校英語）をすでに取得している場合、本研究科の修了必要単位を修得することで、免許申請に必要な単位をほぼ修得することが可能です。

08. 言語コミュニケーション文化学会

「言語コミュニケーション文化学会」は、本研究科の教員と現役学生および修了者からなる学会組織として、2001年4月1日付にて関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科開設と同時に設置された学会です。この学会の主な活動には、毎年9月と2月に開催される「言語コミュニケーション・フォーラム」と研究雑誌『言語コミュニケーション文化』の発行があり、その他にも言語科学、言語文化学、言語教育学、日本語教育学に関わる著名な研究者を招いて講演会を実施し、最新の研究についての情報を学会員に提供しています。また、研究雑誌『言語コミュニケーション文化』は、前期課程・後期課程修了者、後期課程満期退学者および在学中の学会員等の研究成果発表の場であり、原則として年1回発行します。

本研究科修了生の進路状況

本研究科入学者には、大学学部を卒業してすぐに入学する人、仕事を続けながら入学する人、仕事をやめて入学する人、休職して入学する人などがいます。結果として、入学者の職種や年齢構成も幅広く多岐にわたるため、多様なバックグラウンドをもった学生の集まりとなっています。また、関西学院大学以外の大学卒業者が多いのも大きな特徴です。本研究科前期課程修了生の進路は、就職が一番多く、その他本研究科後期課程や他の大学院に進学する人もいます。修了生のうち、就職者（前職への復職・現職の継続を含む）は52.0%、そのうち学校関係（中学、高校、短期大学、大学、専門学校などの言語教育担当教員）への就職が57.7%となっています。学校関係（教員）への就職者が多いことが特徴です。

修了生の進路状況

（2003年3月～2025年3月修了）

修了生	就職者	（内訳）		進学者	その他
		教員	教員以外		
496名	258名（52.0%）	149名	109名	81名（16.3%）	161名（32.5%）

就職者のうち57.7％が教員として就職（前職への復職・現職の継続を含む）

主な就職先一覧

日本電気、京セラ、伊藤忠商事、イーオン、デンソー、読売旅行、エイチ・アイ・エス、ベネッセコーポレーション、ＥＣＣ外語学院、ヤマハ英語教室、日本電子、大広、プロクター・アンド・ギャンブル・ジャパン、メルリックス、楽天、アンスティチュ・フランセ日本、河合塾、エスシー、日本タタ・コンサルタンシー・サービシズ、ニトリ、Asian Bridge、エクセディ、小松製作所、フルタニ産業、マルアイ、暁学園、梅村学園、開智中学校・高校、大阪学芸、大阪信愛女学院、大原学園、関西学院、啓明学院、甲南学園、神戸山手学園、此花学院、須磨学園、瀧川学園、仁川学院、睦学園、カナディアン・アカデミー、東北学院大学、近畿大学、サイアム大学、大阪府立大学、大阪教育大学附属池田小学校、大阪教育大学附属天王寺中学校、中国・大連交通大学、兵庫県高校教員（英語）、西宮市中学校教員（英語）、神戸市中学校教員（英語）、大阪府高校教員（英語）、広島県高校教員（英語）、石川県高校教員（英語）、奈良県高校教員（英語）、その他

大学院担当教員（2025年4月現在）

研究科サイト

研究業績データベース

教員の研究内容の詳細については、研究科Webの「教員一覧」および研究業績データベースを参照

前 前期課程指導教員　後 後期課程指導教員

言語文化学

阿部 卓也（アベ タクヤ） 教授

ドイツ語現代文学、ペーター・ハントケ、西洋古典音楽の拍節論

Comment
現在の中心課題は1750～1900年頃のクラシックの拍節論。いわゆる古楽や現代音楽に関する言説は喧しいが、クラシックのスタンダードとされてきたこの時代にこそ、理論上の重大な欠落があると考えている。

言語文化学

上田 和彦（ウエダ カズヒコ） 教授 前 後

フランス思想、フランス革命、ブランショ、ラクー＝ラバルト

Comment
現代思想で問題となる「文学」、「倫理」、「政治」、「宗教」をフランス革命まで遡って考察しています。目下、フランス革命で民主主義が創設される際、なぜ恐怖政治が起こったか考えています。

言語科学　言語教育学

石川 圭一（イシカワ ケイイチ） 教授 前 後

応用言語学、心理言語学、第二言語獲得

Comment
ことばの仕組みとその認知メカニズムに関心があります。第二言語の獲得・学習の研究を行っており、特に、新しい文法や語彙を学ぶ際、潜在的な学習と明示的な学習ではどのように異なるのか、得られた知識はどのような性質を持つのか、等について調べています。

言語科学

内田 充美（ウチダ ミツミ） 教授 前 後

英語コーパス言語学、英語の歴史における言語接触

Comment
（現代）英語を対象として、人が言語をどのように用いているのかを研究しています。実際に用いられた言語資料を観察する方法で、科学的に適切な記述をすることを目指します。

言語文化学

伊藤 正範（イトウ マサノリ） 教授 前 後

イギリス文学、モダニズム小説、ジャーナリズム、労働運動、群衆

Comment
19世紀～20世紀初頭のイギリス小説を主な題材に、フィクションと当時のイギリス社会・文化との関わりについて研究しています。特にダーウィニズム、ジャーナリズム、そして群衆をキーワードに、小説というジャンルがどのように成長していったかを探っています。

言語文化学

大東 和重（オオヒガシ カズシゲ） 教授 前 後

日中比較文学、日本近現代文学、中国近現代文学、
台湾文学、比較文化論

Comment
日本・中国・台湾の文学を、比較文学・文学史研究の手法で研究しています。日露戦後の文学や、郁達夫と大正文学、台南の文学について本をまとめました。外国人の見た日本・中国・台湾についても関心があります。

言語科学

茨木 正志郎（イバラキ セイシロウ） 教授 前

理論言語学、史的統語論、文法化

Comment
言語は時代とともに変化しますが、特に英語はその歴史の中で相当な変化を受けてきた言語で、さまざまな興味深い現象が観察されます。このような現象に対して、私は生成文法という言語理論を用いて、英語の歴史的変化の要因とメカニズムの解明を試みています。

言語文化学

岩松 正洋（イワマツ マサヒロ） 教授 前

物語理論、小説史、思想史、サブカルチャー研究

Comment
小説（とくに非リアリズム小説）を物語論やコミュニケーション論の観点から理論的に研究しています。また哲学や心理学、認知科学の知見に頼りつつ、文学作品の構成・受容を日常の発話行為や聞く行為の延長に置いて分析しています。

日本語教育学　言語科学

于 康（ウ コウ） 教授 前 後

日本語学、日本語と中国語の対照研究、
日本語の誤用と日本語習得の研究

Comment
主に取り組んでいる研究内容：日本語の語彙研究と文法研究、語彙や文法を中心とする日本語と中国語の対照研究、中国語母語話者日本語学習者の誤用研究及び習得難易度やバックスライティングに関わる日本語の習得研究。

言語文化学

小笠原 亜衣（オガサワラ アイ） 教授 前

モダニズム芸術、身体論、ジェンダー

Comment
パリおよびニューヨークにおけるモダニズム芸術運動を中心に間芸術研究、身体論、ジェンダー研究を行っている。ガートルード・スタイン、アーネスト・ヘミングウェイ、ピカソ、ジョージ・アンタイル、ジュナ・バーンズ、ジョージア・オキーフ、サダキチ・ハートマン、ジェラルド・マーフィー、エドワード・ホッパー等。

日本語教育学　言語科学

Teja Ostheider（テーヤ オストハイダ） 教授 前 後

コミュニケーションの社会心理学、共通語としての日本語

Comment
言語政策、言語教育、言語権、言語行動、言語意識、アイデンティティ、バリアフリーなど、さまざまな観点から「マイノリティ」に対するコミュニケーションを研究しています。例えば、「外国人」や「障害者」と呼ばれる人々について調査しています。

言語教育学

Vivian Bussinguer-Khavari（ヴィヴィアン ブッシンゲル カバリ） 准教授

第二言語習得・英語教育、継承語学習・継承語教育、異文化コミュニケーション

Comment
My research is mainly in the field of Second Language Acquisition (SLA), with a focus on TESOL, and a special interest in Performance in Education (PIE) and its foundation on Mind, Brain, and Education (MBE) Science. I also have a research background in Heritage Language Education (HLE) with a focus on immigrants' HL maintenance and target language (TL) acquisition.

言語文化学

河村 克俊（カワムラ カツトシ） 教授 前 後

西洋近代哲学、ドイツ啓蒙、自由論、概念史的方法、カント

Comment
これまで主に、西洋近代思想史にみられる「自由」について考えてきました。自由は、自律や自発性と同義語とされることがあり、また善悪の問題に関わります。そして自然科学的決定論、運命論、充足根拠律等と矛盾する関係にあります。

言語文化学

禪野 美帆（ゼンノ ミホ） 教授

文化人類学、ラテンアメリカ地域研究、現代の先住民

Comment
先住民と呼ばれる人々が、グローバル化した社会環境を利用しながら、自分たちの文化やアイデンティティの独自性を主張あるいは生成するプロセスについて、特にメキシコを中心に、フィールドワークに基づく研究をしています。

言語教育学

工藤 多恵（クドウ タエ） 教授

英語教育、教材開発

Comment
学習者の自律性を高めるアプローチに関心を持ち、アクティブ・ラーニング教材やアセスメントの開発に取り組んでいます。また、生成AIや機械翻訳などのテクノロジーを活用した場合の教育効果について実証研究しています。

日本語教育学　言語科学

田中 裕幸（タナカ ヒロユキ） 教授 前 後

理論言語学、生成文法、原理・パラメータ理論、統語論

Comment
人間の認知能力を取り扱う科学の一分野としての言語学、特に統語論（文の構成法）を中心に研究を行っています。自然科学の方法で、複雑に見える言語に潜む規則性や普遍性に迫ることができるのがこの分野の醍醐味です。

言語科学　言語教育学

Brandon Kramer（ブランドン クレーマー） 准教授

第二言語習得、語彙学習・指導、言語テスト論、量的コーパス分析

Comment
My research focuses on vocabulary learning, the development of reading fluency, and the measurement of language learning through quality testing. More recently I have begun work in corpus linguistics, specifically looking at the vocabulary (both single words and multi-word units) which students are most likely to encounter.

言語科学

谷 明信（タニ アキノブ） 教授 前 後

英語史、語彙論、文体、phraseology、辞書史

Comment
中英語（1100-1500）から初期近代英語（1500-1700）における語彙と文体を研究しています。文体、ジャンルによる、phraseologyを含めた語彙の変化・変異に注目して、調査を行っています。

言語教育学

氏木 道人（シキ オサト） 教授 前 後

英語教育、リーディング指導、発話活動の効果

Comment
音読やシャドーイングなどの英語の発話が、リーディングをはじめとする英語のインプット技能の向上に与える効果に関心があります。時代の変化に伴い、求められる英語教育の在り方も変わる中で、効果的な英語の授業とは何かを考えていきたいと思っています。

言語文化学

谷口 真紀（タニグチ マキ） 准教授

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ、ミッショナリー・アーキテクト、人物史

Comment
近代日本で活躍した「国際人」の手による文献をもとに、その人物が何をしたかだけでなく、どのような人間であろうとしたかを探ってきました。目下、伝道者かつ建築家、ヴォーリズのことばから彼の人生の図面を読み解いています。

言語文化学

島貫 香代子（シマヌキ カヨコ） 教授 前

アメリカ文学・文化、リージョナリズム、人種とエスニシティ

Comment
フォークナーが描いた20世紀南部を研究していますが、最近はホーソーンが描いた19世紀ニューイングランド地方にも関心を寄せています。これらの地域を主に人種・民族の観点から考察しています。

言語文化学　言語教育学

趙 怡（チョウ イ） 教授 前

比較文学・比較文化、翻訳文学、中国近現代文学、
日本近代文学、上海租界の歴史と文化

Comment
主に20世紀前半のパリ・上海・東京（京都）を舞台に展開された東西文化の交流と衝突について研究しています。とりわけ文化人の異文化体験や、文学作品に描かれた異国風景と異国人形象に注目します。また上海租界の歴史と文化について多言語の史料調査を通して研究を進めています。

言語教育学

住 政二郎（スミ セイジロウ） 教授 前

社会文化的パースペクティブ、CoP、International Baccalaureate

Comment
広義には「人はどこで、どのように言語を学ぶのか」という問いに関心を持っています。そのプロセスに、道具やデザインなどの要素がどのように関わっているのか、創発的なインタラクションに注目しながらCoPを理論フレームに研究をしています。

言語文化学

塚田 幸光（ツカダ ユキヒロ） 教授 前 後

映画学、表象文化論、クロスメディア、
アメリカ文学、モダニズム／ファシズム

Comment
アメリカと日本を軸とした映像文化の研究をしています。映画、写真、ジャーナル、文学、絵画など、網状のテクスト／コンテクストの中で変化する複数の「文化」に対し、クロスメディア的視座からその欲望の政治学を考察しています。

言語科学

住吉 誠（スミヨシ マコト） 教授 前 後

現代英語の語法文法、フレイジオロジー、辞書学

Comment
現代英語の言語資料にもとづいて、これまで気づかれていなかった新しい語法、語法の変化、表現の変異などを明らかにし、統語的・意味的観点から英語にひそむ規則性の実証的解明に取り組んでいます。

言語教育学

寺沢 拓敬（テラサワ タクノリ） 准教授 前

言語社会学、言語政策、英語教育史、
言語使用・言語イデオロギーの政治経済的分析、批判的応用言語学

Comment
言語現象（言語使用、言語に対する態度、言語教育）について社会科学的な理論・手法を用いて検討している。主たるフィールドは日本、得意な分析手法は史資料の内容分析および社会統計である。「日本社会と英語」に関する研究が多いが、それ以外の言語現象にも関心がある。

日本語教育学 言語科学

田 禾（デン カ） 教授

前 後

対外漢語、現代中国語文法、特定文型の使用条件、
日本人学習者の誤用分析

Comment

日本人の中国語学習者を対象とする「対外漢語」の分野で、誤用例を分析しながら、現代中国語の文型及び言葉の使用条件について研究を進めております。中には中国語における類義語と類義表現の分析にも興味を持っております。

日本語教育学

長谷川 哲子（ハセガワ ノリコ） 教授

前

第二言語ライティング、アカデミック・ライティング教育、
日本語ライティング教材の開発

Comment

日本語教育が扱う分野の中で、特にライティングの分野に関心を持っています。文章の分かりやすさ／分かりにくさ、ライティング能力の発達、書くことと社会の関係などが最近関心を持っているテーマです。

言語教育学 言語文化学

中川 慎二（ナカガワ シンジ） 教授

前 後

異文化間教育、授業分析、談話分析、海外日本人コミュニティ、
ドイツ語言語教育政策、CEFR、シティズンシップ教育、識字教育

Comment

シティズンシップ教育（ドイツでは政治教育）の文脈で、言語学習と市民権について研究しています。人の移動が増えていく中で、共生のための知識とその教育実践が重要です。ドイツ語圏と日本における統合政策と言語教育政策に関して研究しています。

言語教育学 言語文化学

福地 直子（フクチ ナオコ） 准教授

前

カウンセリング心理学、英語教育方法論、異文化間教育

Comment

異文化適応、異文化間能力、多文化共生におけるカウンセリングマインド養成教育に関心を持っています。、多文化共生社会に向け、新しい社会教育実践モデルの検討、異文化理解教育の発展などに取り組んでいます。

言語科学 言語教育学 日本語教育学

中野 陽子（ナカノ ヨウコ） 教授

前 後

心理言語学、第一言語または第二言語としての
日本語と英語の形態素処理と文処理

Comment

母語または第二言語としての英語や日本語の語や文が、どのように理解されるのか、あるいは産出されるのか、その仕組みについて、さまざまな実験（行動実験、視線計測などを用いた実験）を行いながら研究しています。

言語文化学

藤野 真子（フジノ ナオコ） 教授

前 後

中国演劇、劇評論、中国民間芸能、中国近現代文学、
上海文化、中国メディア・出版史、呉方言文芸

Comment

20世紀上海における、京劇を中心とした伝統演劇の動向分析をテーマとしている。特に、観客のニーズを踏まえた演技・演目・演出の改革、メディアの発達と劇評との関係を中心に研究を行っている。また関連ジャンルとして、同時期の文学、言語等にも目配りをしている。

言語文化学 日本語教育学

西村 正男（ニシムラ マサオ） 教授

前 後

中国近現代文学、中国メディア文化史、中国語圏の映画、
日中文化交流、ポピュラー音楽、東アジアレコード文化史

Comment

本来の専門は中国文学ですが、ポピュラー音楽研究や映画研究にも関心を持ち、中国や香港・台湾などの音楽や映画の歴史を調べています。日本との関わりについても関心を持っています。

言語教育学

松崎 真日（マツザキ マヒル） 教授

外国語教材論、外国語習得とライフストーリー、韓国語談話分析

Comment

韓国語教育学について幅広く関心を持っています。言語的な面では会話や文章の展開に関心を持っています。また外国語習得が人生にいかなる影響を与えるかといった観点から、移民労働者の研究や、動画教材の制作も行っています。

言語文化学

二村 淳子（ニムラ ジュンコ） 教授

比較文化論、比較芸術研究、東アジア美術史、仏語圏文化

Comment

東アジアにおける「美術」の形成をフランスとの交差のなかで研究しています。一国史では語れない、また、西洋の概念の枠では括れない「東アジア間美術史」について考えています。食の文化研究にも興味をもっています。

言語文化学

松宮 園子（マツミヤ ソノコ） 教授

前 後

イギリス小説、モダニズム、アダプテーション、表象文化

Comment

イギリス小説を研究の中心とし、ウルフやフォースター等のモダニズムの作家から、イシグロ、マキューアン等の現代作家を扱いながら、最近は文学テクスト及びアダプテーション中の芸術表象について考察しています。

言語科学 言語文化学

野上 陽子（ノガミ ヨウコ） 准教授

English as a lingua franca（ELF）、第二言語話者のアイデンティティ、
intercultural pragmatics、質的研究

Comment

第2言語として英語を使用する人のアイデンティティの構築や、話者の語用論的言語使用とアイデンティティの関連性について、共通語としての英語（ELF）を通じた異文化コミュニケーション場面に焦点を当てて研究しています。

言語教育学

三上 明洋（ミカミ アキヒロ） 教授

英語教授法、授業研究、アクション・リサーチ、教師教育、教育方法と評価

Comment

効果的に英語を教育・学習する方法を探っています。授業を中心に理論と実践をつなぐ研究を目指しています。生涯にわたって学び続ける教師の養成・研修の在り方や評価法（妥当性検証など）についても興味があります。

言語教育学

長谷 尚弥（ハセ ナオヤ） 教授

前 後

リーディング指導、アメリカバイリンガル教育、批判的応用言語学

Comment

英語教育、特にリーディング指導に興味を持っている。また、アメリカバイリンガル教育を参考に、言語や言語教育の持つ社会政治的な意味合い（批判的応用言語学）にも関心を持っている。

言語文化学

宮原 一成（ミヤハラ カズナリ） 教授

前 後

英文学、英連邦現代小説研究、物語時制論

Comment

20世紀後半から21世紀の英国・英連邦小説が主な研究対象です。最近は、物語を読むという行為を「贈与」として捉える可能性や、物語を現在時制で書くことの意味について考察しています。

言語科学 言語教育学

村上 陽子（ムラカミ ヨウコ） 教授

社会言語学、言語教育、スペイン語学、スペイン語教授法

Comment

スペイン語話者の言語行動に興味があり、フィールド調査やアンケート調査を通じて、依頼、指示などの言語行動について研究しています。スペイン語をはじめとする言語教育において、学習方法による学びの変化を文法教育の視点から考察しています。

言語文化学

森田 由利子（モリタ ユリコ） 教授

前

イギリス小説/文化、ライフ・ライティング、ヴァージニア・ウルフ

Comment

イギリス小説／文化研究が専門領域ですが、特に「ライフ・ライティング（life-writing）」というジャンルに着目して研究を進めてきました。伝記や自伝、さらには、肖像画や写真、家なども「ライフ・ライティング」であると捉え、考察しています。

日本語教育学

森本 郁代（モリモト イクヨ） 教授

前 後

会話分析、相互行為分析、コミュニケーション・デザイン

Comment

人々が会話をしたり一緒に共同作業をしたりといった、社会生活のさまざまな場面における日常的な活動をどうやって行っているのかを、録音や録画データを基に言語と非言語（体の動きや視線など）の両面から研究しています。

言語科学

山田 一美（ヤマダ カズミ） 教授

前 後

応用言語学、第二言語習得、普遍文法、
L2としての英語・日本語習得、空代名詞、冠詞

Comment

第二言語習得（SLA）では、母語の影響、段階的な発達、体系性、多様性、不完全性が観察されています。これらの現象にはどのような説明が可能なのでしょうか？SLAのメカニズムや習得モデル、また、言語教育への示唆について考察を進めています。

言語文化学

李 建志（リ ケンジ） 教授

韓国朝鮮研究、ナショナリズム、在日朝鮮人問題、比較文学、
マイノリティ問題、朝鮮王族の研究

Comment

朝鮮文学・文化を研究が研究の出発点ですが、現在はその延長線上に、朝鮮最後の王である李垠の評伝を書き続けております。また、韓国で「英雄」とされているテロリストたちについても研究しております。圧倒的弱者は圧倒的強者に立ち向かうとき、テロしかないのは事実です。もちろん、私はテロには批判的ですが。「民族」という枠組で考えるのではなく、自分の頭で考えることを意識しています。

言語文化学

Hans Peter Liederbach（ハンス ペーター リーダーバッハ） 教授

前 後

日本哲学（京都学派）、西洋哲学（近現代）、比較思想（西洋／日本）

Comment

和辻哲郎のハイデガー受容が私の研究の発端であった。現在の私の主な関心は、日本哲学、とりわけ京都学派の現代的意義を検討することにある。この際、西田幾多郎と新実在論（new realism）、和辻哲郎とケア倫理、九鬼周造と他者論などのテーマを研究し、京都学派が現代哲学に貢献できることを掘り出している。

言語教育学

米崎 里（ヨネザキ ミチ） 准教授

英語教育学、英語授業研究、英語指導法、諸外国の外国語教育制度と言語政策

Comment

英語教師が、日々の授業で英語をどう教えていくか明確な理念を構築するために、理論と実践を組み合わせ、日々の授業実践力の向上や効果的な英語指導法の確立に向けての具体的方略を研究しています。最近は諸外国の外国語教育（特にフィンランド）にも学びながら、研究を進めています。

言語科学

渡辺 拓人（ワタナベ タクト） 准教授

英語史、英語学、コーパス

Comment

近代英語を中心に、実証的な立場から英語の史的変化を研究しています。特に、近接未来を指す表現の発達や類似した意味や機能をもつ表現間の競合について関心を持って取り組んでいます。

言語コミュニケーション能力養成科目担当

Andrew Nowlan（アンドリュー ナウラン） 言語常勤准教授

Collaborative online international learning (COIL), intercultural competences, internationalization, second language acquisition, study abroad

Comment

Greetings! In the current knowledge economy, global interconnectedness provides many exciting opportunities to build cross-cultural competences, especially in Japan, where it may be difficult to interact with non-Japanese partners. I try to apply an international dimension to all aspects of the learning process by drawing not only on my personal, professional, and academic experiences, but also those of the students. I look forward to our discussions and collaborations.